★上海京劇訪日団'88★

上海からやって来た絶妙のアンサンブル

「京劇青少年劇場」は、中国の伝統演劇の精髄である京劇を鑑賞する機会を若い世代にも広げ、日中友好の心を次代につなぐことを一つの目的として企画されました。

一九八六年秋にスタートした〝上海京劇院〟の出演に依る「京劇青少年劇場」は、これまでの京劇公演が、とかく大都市、大ホール偏重にならざるを得なかったのを、公演団の構成を可能な限り軽減し、中・小都市、学校での公演を実現しました。

更に、言葉の違いを克服する為の構成と演目の選定に京劇院の協力を得て、成長することに成功しました。

その結果、小学生から大人まで幅広い観客層の鑑賞を可能にして、大きな反響を呼びました。第二回、第三回と回を重ねる毎にマスコミの反響も強く、NHK総合テレビ(春組名「ハローワールド」)をはじめ、各地巡演の度に取材を受けております。

上海京劇院は一九五五年、梅蘭芳と並び称される名優、周信芳を院長として成立しました。一代で〝麒派〟の名を高めた周信芳の指導のもと、とくに観客の目が高いといわれる上海を本拠地とするプライドを秘めて三十年、鍛えられ、育て上げられた実力と芸風は、国際的にも高い評価を得ています。海外公演は、すでにヨーロッパ各国から日本、東南アジアに及び、一九五一年設立の中国京劇院(北京)と人気を分かっています。

第四回になる今回も、梅蘭芳が自分の〝後継者〟とまで絶賛した人気女優、斉淑芳に期待が高まっています。十代で主役を演じた斉淑芳は、今四十歳の〝芸盛り〟、文戯、武戯ともに余人の追随を許さず、また、甘く澄いのある美声で多くのファンを魅了しています。今回は「青石山」で入神の超絶技巧、一転して「秋江」では可憐な娘役で小味のきいた演技を楽しませてくれます。

◆　◆　◆

▼演目紹介……

●孫悟空・大闘天宮

手のつけられない乱暴者・孫悟空は、天宮の官職を命じられて大喜び。その官職の名とは弼馬温。さて、天宮の御馬監では、悟空が馬役人たちにおだてられ、得意満面で馬を乗り回している。そこへ御馬監の長である馬王が現われ、弼馬温というのは、人間界でいえば馬番の下っ端役人にすぎないと馬鹿にされる。怒り心頭に発した孫悟空は、馬王たちを相手に大暴れ……。

文句なしに楽しい孫悟空。京劇ならではの醍醐味を満喫させてくれる。

●三岔口(「楊家将全伝」より)

宗の時代、悪だくみにはまって流刑囚となった名将・焦賛は、護送役人に連れられて、三岔口の宿に泊まる。宿の主人・劉利華は、その焦賛を助け出そうとする義侠の徒。密かに焦賛を守るためにつけてきた任堂惠を刺客と誤解し、また任堂惠も劉利華を護送役人の一味と疑い、ついに二人の格闘が始まる。果たして誤解は解けるか……。

舞台は真っ暗闇の設定。せりふなしで息づまる死闘が続く。計算しつくされた立回り芸――〝だんまり〟の名品であるこの芝居は、死と紙一重の武打としてあまりにも名高い。

●青石山(九尾の狐)

青石山のふもとに、妖術を身につけた九尾の狐が住んでいた。この狐が書生の周徒倫を惑わしたので、法師の王半仙は狐をこらしめようとするが、逆にさんざんにからかわれる始末。そこで八仙人の一人、呂洞賓が四方から神仙を呼び集めて、妖狐と術比べの戦いを始め、やっとのことで狐を打ち負かす。

斉淑芳が狐に扮して入神の早業を見せ、背中の軍旗をあやつって、次々に飛んで来る槍をひっかけたり、回したりして巧みにさばく。これを演じられるのは中国で彼女ただ一人といわれている。

●秋江

尼僧の陳妙常と観主(尼寺の師僧)の甥・潘必は秘かに愛しあっていたが、それに気づいた観主は潘必をむりやり臨安へ遣り、科挙の試験を受けさせることにした。妙常は後を追って秋江の渡場から船に乗り潘を追いかけようとする。老船頭は妙常の気持ちを知りながらわざとからかって彼女をじらす。しかし心の優しい老船頭、最後には櫂をふるって潘の船を追いかけて行く。ぴったりの呼吸と一本の櫂で迫真の演技を披露。

※上演プログラムは左記演目から選ばれます。